

第 12 回国語分科会国語課題小委員会・議事録

平成 29 年 9 月 21 日（木）

10 時 00 分 ～ 12 時 10 分

旧文部省庁舎2階・文部科学省第2会議室

〔出席者〕

（委員）沖森主査，森山副主査，石黒，入部，川瀬，塩田，鈴木，関根，滝浦，
田中，やすみ，山元各委員（計 12 名）
（文部科学省・文化庁）西田国語課長，井上文部科学戦略官，平山専門官，
鈴木国語調査官，武田国語調査官，小沢専門職ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 第 11 回国語分科会国語課題小委員会・議事録（案）
- 2 文化審議会国語分科会 文化芸術推進基本計画に向けた意見（案）
- 3 成果物の構成について（素案）Ver. 1. 2

〔机上配布資料〕

- 文化芸術の振興に関する基本的な方針—文化芸術資源で未来をつくる—
（第 4 次基本方針）
- 文化芸術基本法
- 文化芸術推進基本計画（第 1 期）に係る検討状況について
（第 65 回国語分科会（H29. 9. 8）資料 2-1）
- 今後の文化芸術施策の目指すべき姿と今後 5 年間の基本的な方向性（案）
（第 65 回国語分科会（H29. 9. 8）資料 2-2）
- 文化芸術推進基本計画策定における国語分科会の関わり方について
（第 65 回国語分科会（H29. 9. 8）資料 3）
- 文化芸術推進基本計画に盛り込むべき基本的施策（国語分野）案
（第 65 回国語分科会（H29. 9. 8）資料 4-1）
- 文化芸術推進基本計画における指標（国語及び日本語教育分野）案
（第 65 回国語分科会（H29. 9. 8）資料 5）
- 国語関係答申・建議集
- 国語関係告示・訓令集
- 国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）
- 文化審議会国語分科会 文化芸術推進基本計画に向けた意見（案）見え消し版
- 国語に関する世論調査 分類別問い一覧（平成 28 年 12 月 6 日版）
- 「平成 28 年度 国語に関する世論調査」概要版及び報告書

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認が行われた。
- 2 前回の議事録（案）が確認された。
- 3 配布資料 2 「文化審議会国語分科会 文化芸術推進基本計画に向けた意見（案）」
について説明があり，説明に対する質疑応答と意見交換が行われた。
- 4 本日出された意見に基づく配布資料 2 の修正及び国語分科会での報告について，
沖森主査に一任することが了承された。
- 5 配布資料 3 「成果物の校正について（素案）Ver. 1. 2」について説明があり，説明
に対する質疑応答と意見交換が行われた。

- 6 次回の漢字小委員会について、平成 29 年 10 月 20 日（金）午後 3 時から 5 時まで旧文部省庁舎 2 階・文部科学省第 2 会議室で開催することが確認された。
- 7 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査

ただ今から第 12 回国語課題小委員会を開会します。

本日は、前回の議事録（案）の確認、文化芸術推進基本計画に盛り込むべき基本的施策及び指標についての協議、コミュニケーションの在り方及び言葉遣いについての協議の順で進めてまいります。

まず初めに、文化芸術推進基本計画に盛り込む国語分野の基本的な施策や評価指標について、事務局の平山専門官に説明をお願いします。

○平山専門官

配布資料 2「文化審議会国語分科会 文化芸術推進基本計画に向けた意見（案）」が、本日お諮りしたい資料です。ただ、9 月 8 日の国語分科会を御欠席の委員もいらっしまったかと思しますので、現在の状況についておさらいいたします。

机上資料の中にある、9 月 8 日の国語分科会配布資料 3「文化芸術推進基本計画策定における国語分科会の関わり方について」を御覧ください。全体の状況としましては、文化芸術基本法が改正され、それを受けて、文化芸術推進基本計画を策定することになりました。それについて、文部科学大臣から 6 月に文化審議会に諮問があったので、これまで総会や文化政策部会において検討が行われてきました。その検討を踏まえ、基本計画に盛り込むべき、国としてどういう施策にこの 5 年間で取り組んでいくかという基本的施策、その基本的施策や施策の効果を測る指標について、各分野別に、それぞれの分科会やワーキンググループで検討することになりました。国語分野や日本語教育分野については、国語分科会で検討して、その結果を文化政策部会に報告するということになっています。

1 回目の審議については、9 月 8 日の国語分科会で実施しました。2 回目の審議は、国語分野については、本日のこの国語課題小委員会をお願いします。9 月 8 日の国語分科会終了後に、追加の御意見等あればメールでお寄せくださいとお願いをしていましたが、国語課題小委員会の委員の皆様からは追加の御意見等はありませんでしたので、その旨御報告します。

その次にある資料、9 月 8 日にお配りした配布資料 4 - 1 と配布資料 5、この内容を国語分科会としての報告書の形に落とし込んだものが、本日の配布資料 2 です。基本的には、9 月 8 日にお配りした資料の内容を更新したものが、本日の配布資料 2 とお考えいただければと思います。

では、9 月 8 日時点との変更点を中心に、配布資料 2 について、御説明します。委員の皆様の上には、一部赤色で変更点を分かる形にした見え消し版の資料も配布しておりますので、そちらも参考にいただければと思います。「国語分科会 文化芸術推進基本計画に向けた意見（案）」ということで、10 月 13 日に予定されている文化政策部会で、伊東分科会長から報告していただこうと考えている資料の案です。

検討結果を以下のとおり取りまとめたもので、国語分野については、1 ページと 2 ページにまとめてあります。まず、言葉の意義や、文化におけるその意義について、リード文のような形で最初に書いております。文化の基盤としての国語の果たす役割や重要性を踏まえて、国として施策を講じていく必要があるということを書いております。その下、基本的施策として、全部で 10 個の項目を書いております。1 ページ目に掲げている三つの項目については、主語として「国は」というのを付けた程度の変更です。

2 ページ目ですが、こちらにも主語を明確にしました。そのほか、上から四つ目の項目と五つ目の項目、子供の読書に関する項目と、文字・活字文化に関する項目で、9月8日の分科会で山元委員から、図書館に携わる人材が非常に重要であるという御意見を頂きました。その御意見を踏まえ、「図書館に携わる人材の養成・研修を含め」という文言を明記しております。その下、「外来語・外国語の氾濫などの状況や」で始まる項目ですが、文章のつながりが良くないのではないかという御指摘を川瀬委員から頂きました。言葉の順番を入れ替えるなどして、少し修正しました。一番下のところに、これらの施策を測る指標として、次の二つの指標の案を書いております。こちらは、9月8日の会議で配布した指標案をそのまま転記しています。以上です。

○沖森主査

ただ今の事務局からの御説明を踏まえて、配布資料2、1 ページ目、2 ページ目で示されております基本計画に盛り込むべき基本的な施策の案及び指標について、何か御意見等があればお願いいたします。

○田中委員

新規に加えられた前文のところ、二つほど伺います。

2行目の「母語」としているところですが、こちらは、第一言語とすると、一般になじみにくいので、どちらかという通りが良い母語を選択されたのか、ということが一つ目です。

続いて、2行目の「例えば」以降。いろいろ挙がっていますが、漫画も、いろいろ注目を集める場所だと思います。せっかくアニメが挙がっているので、漫画・アニメなどとしてはいかがでしょうか。文化庁でやっているものでも、漫画の発信に大分力を入れていきますね。漫画は入った方がいいのではないかと思います。

○平山専門官

まず、「母語」という言葉を使った部分ですが、第4次基本方針という、政府全体の文化の基本方針をまとめたものがあるんですが、既にそちらで「母語」という文言を使用しています。それを閣議決定していますので、そこから言葉を借りてきて、そのまま使用しています。それによって大きな問題は起きていないかなと考えていたところ、です。

○田中委員

大学などの教育機関では、「母語」という言い方は、留学生の募集などに際しても回避するように最近しています。「第一言語」や、「第一言語」が少し分かりにくければ、問合せをしてとか、もう少し開いた言葉で補足説明などしています。もう書いてあるから書いてあるとおりに、といった御趣旨と理解しました。

○平山専門官

2点目は、漫画を追加するという点については、貴重な御意見を頂いたので、追加する方向で検討させていただければと思います。

○塩田委員

第2パラグラフの「このような文化の基盤としての国語の果たす役割」の部分について。第1パラグラフは、言葉とか言語・方言という形で、一般論として広げています。これは世界全てについて言っています。それに対して、ここで日本に集約していく。それも、音声日本語に集約しています。当然、ここには手話については触れない。

触れないでかまわないんですが、「このような文化の基盤としての国語」と言うと、急に狭まった感じがしました。今まで一般論としての言葉とか言語とか方言をやっていたのに。だから、「このような文化の基盤として、国語の果たす」であればかまいませんが、「…としての」と言ってしまうと、急に限定が厳し過ぎる気がしました。手話については、ここで触れないことは管轄外ということでもいいですが、「文化の基盤としての国語」、こうしてしまうと、手話が完全に排除されてしまうと思います。

○平山専門官

そのこのところ、「このような文化の基盤として、」と修正したいと思います。

○山元委員

2 ページ目の指標のことです。「（常に 75%以上となることを目標）」とありますが、数字を出すと、根拠などいろいろと問われるので難しいということが前回の会議でもありました。そこで、現状の割合の向上、例えば5%向上とか、そういった書き方も可能性としてあるのではないかと思いました。

括弧の中はきちっとした文章になるときにはなくなるのかもしれませんが…。

○平山専門官

机上配布資料ですが、国語分科会の配布資料5を付けております。御覧ください。これらの指標案として挙げているものは、「国語に関する世論調査」で過去に調査したことのある項目です。年度によっては75%を下回っている年もありますが、既に75%を超えている年も多いという状況です。これは、右肩上がりにずっと上がっていく数字かと言いますと、全体に対する割合なので、そういったものでもないかと思います。

事務局としては、国民の4分の3以上は、国語に関心があるとか、日本語を大切にしているというような状況を維持していきたいと考えています。もちろん、更に上を目指していくことを否定してはありませんが、大体そういったところを指標として考えた次第です。前よりも5%上げられるかどうかということも、飽くまで全体の中での割合なので、実現可能性なども含めて、4分の3を一つ切りの良いところと考えて、75%に設定させていただきました。

○森山副主査

2行目のところですが、「その言葉を母語とする人々の文化とも深く結び付いている」という部分ですが、ここの段階で「生活」を入れた方がよいと思います。その2行後の「過去の人々の歴史や生活」や、「多様な地域文化」では、「生活」というのはありますが、2行目の総括としての部分に「生活」が入っていないというのはいかがでしょう。

例えば、日常生活で医者の方のいろいろな専門的な言葉を理解するとか、あるいは、選挙できちんと言葉をしっかり理解して投票するとか、そういったことを含めてです。

○平山専門官

例えば、「その言葉を母語とする人々の生活や文化とも深く結び付いている」と修正するというところでよろしいでしょうか。

○森山副主査

はい、結構です。

○川瀬委員

ときどき「言葉」と「国語」と「母語」の定義が頭の中で混乱します。最初の序文のところで、「言葉は」と始めて、「その言葉を母語」とあります。この部分は、「国語は」で始めれば、「その言葉を母語とする」はなくてもいいのではないのでしょうか。「言葉は」で始めるのであれば、その言葉を母語としなくても、生活や文化とはどこにあっても、ネイティブであろうとなかろうと、深く結び付くと思います。先ほど、閣議報告の話もあり、どうしても「母語」という言葉を入れるべきというのを感じるのですが…。

「言葉は」というときの「言葉」は、言語一般の意味ですよ。

○平山専門官
そうです。

○川瀬委員
とすると、「人々の意思疎通の手段であると同時に、人々の生活や文化とも深く結び付いている」で十分だと思います。「その言葉を母語とする」ということを生かしたいのであれば、「国語は」だと思います。

○塩田委員
「国語」には、言語全般のことを「国語」と言った時期があります。今は余りやりませんが、フランスの国語はフランス語だとか、そういった意味での「国語」です。また、日本で一般的に使っているのは、日本語の意味での「国語」です。さらに、学校教育の教科としての「国語」です。

ここでは恐らく2番目の意味で、第2パラグラフから言っていると思います。最初の「言葉」は、言語全般です。この「言葉」の定義では、言語と方言がある。私自身としては、手話言語も含まれると思っています。であるとするならば、私は、このままでいいと思います。一番広い意味での「言葉」ということを使って、言語、方言、手話言語、全部含めて「言葉」と言っているんだと思います。

○平山専門官
先ほど、「母語」という言葉の使い方について、御意見もありましたので、再度事務局で検討いたします。意味としては、ネイティブとして言葉を使っている人たちについては、その身に付いた生活や文化とが非常に深く結び付いているということを述べています。

○沖森主査
「言葉」の一般論と、「国語」という言葉を第1パラグラフで出したいというお気持ちは、私も共通して今感じました。ただ、どこで示すか難しいです。第2パラグラフで、ようやく「文化の基盤として国語」が出てくるところがどうかということもあります。

○塩田委員
あるいは、「母語」を含む文を隠すという手もあるかもしれません。「…であると同時に、人々の文化とも深く結び付いている。…」というように、「母語」も「第一言語」も使わない。「母語」をどうしても出すのであれば仕方ないのですが…。

○平山専門官
「母語」という言葉を使わないことも選択肢に入れて、検討いたします。

流れとしては、言葉全般について話をした上で、具体的に国として取り組んでいく国語施策について述べていくところを、第1パラグラフ、第2パラグラフという流れで構成しています。

○入部委員

3行目ですが、コンピューターゲームのところ。「コンピューターゲームなどの創作活動」とありますが、「創作活動」のイメージがコンピューターゲームに対しては、個人的にはありません。これまでコンピューターゲームが、文化、芸術というところに文言として入っていたというものはありますか。

○平山専門官

文化庁として、メディア芸術の作品として表彰しているものの中にコンピューターゲームの作品も過去にありました。文化活動、創作活動で出てきた作品の中の一つという位置付けは、文化庁としてはしてきたということです。

○入部委員

そのような経緯があるのであれば、このコンピューターゲームが入っていてもかまわない。

○塩田委員

例えば、「創作活動」だけでなく、「創作活動・創作物」というようにするのはどうでしょうか。ゲーム自体は、活動なので、創作活動・創作物と掛けてもいいかという気もします。

○山元委員

2ページ目の「・」の下から2番目について。この提案について、最後の文、「それと同時に、国民の言語への影響に関する関係機関」の意味が分かりにくい。これは、公用文の表記等を、国民の言語に対する影響が強い関係機関のも求めるという意味ですか。

○平山専門官

そこは、国民に分かりやすい表現を用いるようにしてほしいということです。その前提条件として、外来語等の氾濫や、マスコミ等の影響力などを前提として書いておられます。そういったものを自覚していただきたいということに関係機関にお願いしていくという趣旨で書いておられます。ですから、ここは公用文の表記の在り方を、ほかの民間団体にも求めるということではないです。

○山元委員

関係機関の表現などが、国民の言語への影響力が強いので、注意をという意味ですか。

○平山専門官

はい、そうです。

○川瀬委員

私だけではないと思いますが、「自覚を求める」と言われると、マスコミの一員として、かなり切ないです。前回の国語分科会の時も、前半と後半がかみ合わないという

ことを申し上げたのと同時に、媒体が悪いといったニュアンスがあるような感じがしました。

国民の言語への影響に関する関係機関＝放送、出版等の様々な媒体だとすると、「自覚を求める」と言われるのは、かなり切ないというか、心外です。自覚を求められなくても、それぐらいは考えておりますと言いたくなります。私だけでなく、恐らく何人か同様に感じている方がいらっしゃるんじゃないかと思います。一々目くじら立てる部分ではないのかもしれませんが…。

○平山専門官

ここも、現在生きている第4次基本方針で、既にこの言葉が閣議決定されております。それをそのまま横すべりさせてきた部分ではあります。ただ、今回御意見いただきましたので、書き方がもう少し検討いたします。

○塩田委員

「関係機関の継続的な自覚を」などではどうか。

○川瀬委員

そうですね。やっていないわけじゃないんですよという…。

○塩田委員

これまでも自覚していました、さらに継続的な自覚をという感じでしょうか。

○川瀬委員

あと、放送、出版等様々な媒体のせいだけにされてしまっているようなところも…。

○沖森主査

第4次基本方針の26ページの真ん中辺り、既に入っている文言ですね。

○川瀬委員

そうです、だから、そのときに反対しなかったのがいけないんでしょうけれど…。

○平山専門官

まずは、行政機関として、公用文の表記の在り方を検討するということが最初に来ています。

その上で、「関係機関」にも分かりやすい表現をお願いしていくという流れになっていますが、書き方は検討いたします。

○川瀬委員

多分、ここに至るまで大分御検討なさっているとは思いますが、かえってかちんとくる表現になってしまったと感じました。

○関根委員

どちらかと言えば、分かりやすい表現について、苦勞して心掛けてきたのは、むしろ「関係機関」の方です。そういう思いも我々にはあります。

○塩田委員

では、「関係機関にも」などとするか。

○関根委員

「関係機関」としては、個別にやっていた部分を、国の方が率先してやることによって、またそこで齟齬^{そご}ができ、また分かりにくくなるということがある。だから、その辺りの調整をやっていくべきだろうと思います。

公用文に関しても、各省庁で、それぞれの表現・表記文化みたいなのがあって、それぞれ個別になっています。それをこの際、もうちょっと全体を通して統一感のあるように見直して、より分かりやすいものに改めていく。それが同時に、関係機関、あるいは、国民一人一人が書く場合でも、それがよりどころになって、分かりやすい文章を書けるような、話し方ができるような、そういう指針になればいいと思います。

だから、どちらがどちらに自覚を求めると言うよりは、そういう全体的な調整を視野に入れて、検討していくとなればよいと、個人的には思っています。

ついでながら、前回から気になっていたんですが、「国民に分かりやすい表現を用いるように努める」とは、何度読んでも、国民に対して強いているようにも読めます。ただ、ここで「国は」という主語が入ったので、誤解は余りなくなったと思いますが、どうもここを読むと、国民に用いるようにしなさいと言っているようなニュアンスに取れます。分かりやすい表現を用いるように努めるのは、国です、公用文です。それがはっきり分かるように書きたいところです。

○平山専門官

「国民にとって」などいかがか。

○関根委員

何かもう少し補っていただくと、誤解がなくなるのではないかと思います。

○入部委員

今の部分と比較して、机上資料の、配布資料2-1ですが、「ブランディング」とか、「イノベーション」とか、「プラットフォーム」とか、「レガシー」とか、こんなに片仮名語を使っていて、それで「関係機関」に対して「自覚を求める」という言い方はないと思います。これもやはり国民目線からの御意見としてあると思います。その辺の整合性という意味では、どのようにお考えですか。

○井上文部科学戦略官

その御指摘は文化政策部会でも頂いております。現在見直している案では、可能な限り日本語を使う方向で検討しております。例えば、「国家ブランディング」は、定義が余り固まっておらず、移入された言葉であり、「イノベーション」は、日本語に言い換えると、本来の意味が多少損なわれてしまい、そういうものはなかなか難しいです。

「プラットフォーム」は、「基盤」という意味なので、言い換えます。可能な限り、日本語を使うよう工夫をしたいと思います。

○入部委員

「レガシー」はどうでしょうか。

○井上文部科学戦略官

「レガシー」については、「遺産」という意味です。これは、文化審議会に大臣から諮問された諮問文の中で「レガシー」が使われています。一般に、最近、2020年の東

京オリンピック・パラリンピックに関連して、2020年東京オリンピック・パラリンピックで使った後の施設や文化、人々の行動様式などについて遺産として残していこうという運動が起こっています。

そういう言い方について、「レガシー」という言い方がされていると思いますが、中間報告や答申の中では、適切な言葉に置き換えたいと思っています。

○入部委員

安堵しました。

○川瀬委員

わざわざ「遺産（レガシー）」とするのもどうかと思います。

○石黒委員

今の下から2つ目に関連してですが、「国民に」というのが、もちろん閣議決定されているということではあります。もう一つの基盤として、次のページにありますが、日本語教育があります。私自身は留学生に日本語を教えている身ですが、分かりやすいということは、別に日本国民と限らなくてもいいと思います。分かりやすい言葉は、海外から来た人にとっても分かりやすくあるべきだと思うし、せっかく二本柱を立てているのに、そこをわざわざ国民と限定する必要があるのかなと疑問に思います。その上の「国民が豊かな文字・活字文化」というところも同じように感じます。

もう一つは、「国民の言語への影響に関する関係機関」ということです。読みようによっては、メディア関係の方が「えっ」と思われたということは、そちらの方に向けて書かれたことでしょうか。正直、この「国民の言語への影響に関する関係機関」という言葉の意味が分からない。「に関する」がすごく曖昧で、曖昧にしておいた方が良い部分もあるのかもしれませんが、この表現自体が、自覚を求める表現の割には、意味が分かりにくいと感じました。

○平山専門官

この項目全体について、今頂いた御意見を踏まえ、再検討いたします。

○鈴木委員

放送・出版の場合は、明らかに分かりにくさを基本概念とした文章を世に問うことがあるということだけ、御承知おきいただければと思います。

特に、冒頭のところで、例示として、「小説や詩などの文学作品」と入っていますので、文学作品は分かりやすいとは限りません。それだけ心得ていただければと思います。

○塩田委員

先ほどから問題になっている段落で、「国民の言語への影響」とありますが、「国民の言語」とは、多分、ほかに出てきていないのではないのでしょうか。本当は違いがありますが、「国語」でも大体同じことかと思っています。「国民の言語」とは、私は音声日本語と手話が入ると思っていますが、ただ、これは「国語」でもいいんじゃないかという気がいたしました。

○沖森主査

「国語への影響」ということですね。

では、この基本的な施策及び指標についての本日の審議は、これまでとさせていた

できます。文化政策部会に国語分科会から報告する必要があります。その資料について、国語分野については、国語課題小委員会の主査である私に御一任いただきでよろしいでしょうか。ただ今の御意見も十分反映させるように努めてまいりたいと思います。よろしいでしょうか。（→ 了承。）

では、御異論がないようですので、私に御一任いただいたということにさせていただきます。文化芸術推進基本計画に関して、国語分科会から文化政策部会に報告する資料については、先ほど御一任いただきましたが、伊東分科会長と相談させていただいて、全体として国語分科会から御報告するというようにさせていただきます。

本日の文化芸術推進基本計画についての御審議、誠にありがとうございました。

それでは、コミュニケーションの在り方及び言葉遣いについての協議に移ります。前回の国語課題小委員会の後、主査打合せ会を3回開催しました。本日、たたき台として示せるよう検討を進めてきました。

本日と、次回予定されている国語課題小委員会で検討していただいたところまでを踏まえて、10月末に予定されている国語分科会で中間報告をしたいと考えております。

配布資料3「成果物の構成について（素案）」を御覧ください。前回の国語課題小委員会で皆様から頂いた御意見を踏まえて、整理し直したものです。まず事務局から、配布資料3の概要について説明をお願いします。

○武田国語調査官

配布資料3を御覧ください。簡単に全体の概要、構成、前回と変わったところなどをお話しします。

まず、目次を御覧ください。前回までと、ⅠとⅡの章立ては変わっていませんが、前回まで、Ⅰは、項として2項、2節だけでした。それが今、四つになっております。Ⅰについては、伝え合いというもの、コミュニケーションを「伝え合い」という言い方で捉えて、その「伝え合い」というのはどういうものなのか、またどういった課題があるのかを踏まえるところになります。

Ⅱでは、これからの社会に求められる言語コミュニケーション、言葉による伝え合いの在り方ということに入っていきます。先日の主査打合せ会の段階までは、ここは二つ、下の2、3だけでした。今回は、Ⅰの現状把握、課題を明らかにしたものを受けて、まず、そういった課題をどう解決していくのか、どうその課題と向き合っていくのかということを押さえた上で、より具体的な話に入っていくという流れをお示ししております。

Ⅲは、ずっと話題になっているQ&Aです。後ほど、前半については、具体的に御検討いただきたいと思いますと思っておりますが、Ⅲの部分、9ページを御覧ください。現在、主査打合せ会で、大体20強のQ&Aが、各1ページずつ検討されています。今日は、その問いとショートアンサーだけを並べてお示ししております。次回までにこれをもう少し整理して、数が増えるかもしれませんが、Q&Aを御覧いただきたいと思います。

前回の国語課題小委員会で話題になりましたが、ここに挙がっているQ&Aは、中を読んでいきますと具体的な話に入っていきますが、問いとショートアンサーに関しては、比較的抽象的なレベルでの問いと答えになっています。こういったものを今準備している段階になっています。

○沖森主査

ただ今の事務局からの配布資料3の概要に関する直接の御質問がございましたら頂きます。御意見については、後で頂くことにいたします。いかがでしょうか。

（→ 挙手なし。）

それでは、この配布資料3について、逐次検討してまいりたいと思います。今回は、

冒頭から少しずつ読み進めながら、御意見を頂きたいと考えております。

まずは、1ページの四角で囲んだ報告の前書き、リード文に当たるような部分について、事務局に読み上げていただき、その後、協議に移りたいと思います。

○武田国語調査官

では、1ページの四角で囲んだ部分を読みます。

「私たちは、一人一人が異なる存在である。とりわけ現代は、価値観が多様化し、共通の基盤が見付けにくくなっている時代である。こうした「多様な私たち」を前提とした社会で生きていくためには、伝え合い、特に言葉による伝え合い（言語コミュニケーション）によって、情報や考え、気持ちをやり取りし、互いの共通理解を深めていくことが欠かせない。

言語環境が大きく変化する中で、何をどのように伝え合うことが望ましいのか、これは、複雑化した今日を生きる私たちの多くが抱える悩みである。

伝え合いに完全な正解はない。しかし、より望ましい伝え合いに近づくための方法は、きっとあるはずである。文化審議会国語分科会は、伝え合い、特にそのうちの言葉による伝え合いにおいて意識すべき大切な観点として、「正確さ」、「分かりやすさ」、「ふさわしさ」、「距離の心地良さ」の四つを掲げる。これらの観点をヒントとして提示し、言葉によって望ましい伝え合いを実現するための工夫を共に考えていきたい。」

○沖森主査

ただ今の部分について、御自由に意見を頂きたいと思います。質問でも結構です。さらに、具体的な修正案、検討すべき点がまだあれば、是非とも、御意見を頂きたいと思います。（→ 挙手なし。）

後で御指摘いただいても結構です。では、先に進めます。続きまして、2ページの「I 伝え合いに関する基本的な考え方」に移ります。「1 コミュニケーションへの期待」の部分を読み上げていただき、その後で意見交換をお願いします。

○武田国語調査官

1 (1) と (2) を読みます。

「(1) コミュニケーションの重視

コミュニケーションをめぐる力が重要視されている。関連する書籍が数多く出版されているほか、主に大学生などの若者に向けてなされてきた近年の提言では、身に付けるべき能力の一つにコミュニケーションをめぐる力を掲げるものが多い。企業が新卒者を採用するに当たり特に重視する点として、「コミュニケーション能力」が10年以上にわたって第1位に挙げられているといった調査結果もある。

学校教育でも、旧来の学力観の中心となっていた知識や技能だけでなく、思考力・判断力・表現力などが重視され、対話を深めながら、主体的に学ぶことを目指している。学力は、一方的に教え込むのではなく、コミュニケーションを通して築かれていくものとして捉えられるようになってきた。

(2) コミュニケーションは魔法のつえか

しかし、コミュニケーションやコミュニケーションをめぐる力は、様々な問題を立ちどころに解決に導く魔法のつえというわけではない。

まず、どういったコミュニケーションが望ましいと言えるのか、社会全体としての「正解」はない。例えば、「コミュニケーション能力」とは、言葉の使い方に関する能力として捉えられることも、問題解決能力や企画力、発想力など、言葉以外の面にもまたがる総合的な力を指して用いられることもある。考えをはっきりと言語化して伝達

する力とみなす人もあれば、言葉にせずとも相手の意図を察しそれに合わせ行動することであると考える人もいる。時と場合、使う人によって意味するところが変わる用語であり、誰もが同じようなイメージを分かち合っているわけではない。

また、円滑なコミュニケーションは、個々人が何らかの力を身に付けていれば達成されるというわけではない。実際のコミュニケーションは必ず複数の人によって行われ、その都度、参加する人たち皆で一緒に築かれる。コミュニケーションがうまくいった、あるいはいかなかった理由を、安易に誰か個人の持っている能力のよしあしに帰することはできない。一つ一つの課題について、コミュニケーションに関わる人それぞれが、皆、責任を負っていることを意識する必要がある。

さらに、現代のコミュニケーションは、そのための媒体や手段が多様になっており、それらを臨機応変に選び、時には幾つかを併せ用いながら行われている。使用されるメディアの変化は速く、生活様式や年代などによって、選ばれるものが変わってくるだけでなく、人によって、得意な方法が異なっている面もある。コミュニケーションの在り方は、多様な媒体や手段によって影響を受けるものである。

では、望ましいコミュニケーションのイメージを、社会全体でどこまで分かち合うことができるだろうか。それを考える上では、コミュニケーションと呼ばれてきた事柄のうち、どのような側面について取り上げるのかを、できるだけはっきりとさせなくてはならない。以下、この報告では、様々な意味合いで捉えられることのあるコミュニケーションのうち、情報や考え、気持ちをやり取りし、互いについて共通理解を深めていくことを、伝え合い、という言葉で表していく。」

○沖森主査

では、ただ今読み上げていただいた部分について、御意見を頂きたいと思います。

○田中委員

(2)の第3パラグラフ、「また」で始まるところの下から3行目のところです。「安易に誰か個人の持っている能力のよしあしに帰することはできない」。「能力のよしあし」とは、ちょっとなじみのない言葉だと思います。「…のよしあし」がなくても、「安易に誰か個人の持っている能力に帰することはできない」でも十分に通じるような気がします。

次のパラグラフ、「さらに」のところの下から2行目、「人によって、得意な方法」。「得意な方法」だけど、もう少しふさわしい言葉があるかもしれないと考えています。具体的な代案は考えているところです。

○山元委員

今の部分に重ねてですが、「得意な方法が異なっている面もある」という主張と、その後の「多様な媒体や手段によって影響を受ける」とのつながりが、飛躍があるように感じました。つまり、人によって選ぶ方法が違うがゆえに、というつながりなんですか。それとも、いろいろありますね、ということが言いたいのか。もう少し明確な方がいいと思います。

○川瀬委員

(1)の調査結果のところですが、「第1位に挙げられているといった調査結果もある」とすらっと言っていますが、せめて、どこそこのというのは少し入れておいていいかと思います。この書き方ですと、信憑性^{びよう}がないかなという気がしました。ただ、元データがものすごく長い名前だったりしたら、ただの序文の部分なので、余り気にし

なくてもいいのかとも思います。

○滝浦委員

どこで発言したらいいか分からなかったんですが、全体を通して、二つのことを感じました。

一つが、長さに関することです。「Ⅰ」は、大変重要な部分であるということは、もちろん重々分かるんですが、この中で、第1節が5ページ書かれています。第2節は1ページちょっとなので、大分1節が長いという感じがあります。

あと、ぱっと見たときの取っ付きやすさを考えたいと思います。例えば、4ページ、5ページを見開きで見たときは、項目が幾つかあって、割と読みやすそうな感じがします。2ページ、3ページを開くと、割と長いという印象があります。本当にみんなこれを読んでくれるのか、途中でやめてしまうのではないかという感じがあります。余り無理なく最後まで読んでくれるように、余り長過ぎない方が良くと思いました。そういう意味では、1の(2)と2の(1)、最後の辺りも少しですが、若干縮めていくようなことができれば、その方が読みやすいと思います。

あと、それとの表裏ですが、Ⅱに「3 四つの観点を生かすために」というところがあって、これはこれで提言的な面で非常に大事なところだと思います。ただ、こちらは項目だけで説明はないので、場合によっては、Ⅰにいろんなものが入っていますが、割と具体的なことを述べている部分については、Ⅱの後ろに説明的に回していてもいいかもしれません。そういった配分をお考えいただいたら、もっと親しみやすい文章になると思いました。

○武田国語調査官

先ほど申し落としていましたが、7ページ以降、Ⅱに関しては、まだ概要だけとなっています。この部分はもう少し厚みが出ることになります。

今の御指摘については、分かりました。ありがとうございます。

○やすみ委員

私も感想を述べさせていただきます。今もおっしゃっていたように、ちょっと丁寧過ぎるところが前より増えた印象を受けました。そういったところで言うと、例えば、田中委員からの御指摘にあったような、「よしあしに帰することはできない」の「よしあし」ですとか、得意な方法が異なっている面もあると。これも「得意な方法」ではなくても、手法が異なっているというような言い方でまとめてしまってもいいと思います。こういう丁寧なちょっとした一言をもう少し整理すれば、読みやすく、まとまった印象になるかという感じがいたしました。

○塩田委員

今のところで、「能力のよしあし」について、私も同じように感じました。能力が良いとか、能力が悪いという言い方はしないので、普通は、能力があるかないか、あるいは、優れているか優れていないかだと思います。能力の優れ・優れてないというのは、これは名詞にできないので、能力の有り・無しでもいいかと思います。

「得意な方法」について、もしこのままの構文で行くんだったら、恐らくここで主張したいことは、得意か不得意かということよりも、人によって好む手段が異なっているという、スマホが好きだとか、手書きが好きだということかと思いました。

あと、下から2行目の「…、伝え合い、という…」の「、」の使い方ですが、この文の中で、例えば、いわゆる発言内容のかぎ括弧ではないかぎ括弧の使い方、例えば、「…としての「正解」はない。例えば「コミュニケーション能力」とは、…」とあるの

で、ここも「伝え合い」という強調をしてもいいかと思いました。

○川瀬委員

ここの「伝え合い」って、前文の四角の枠の囲った中にもぽっと出てきていますが、これをすらっと流してしまっていていいのか、気になっていました。でも、ここに一々かぎ括弧付けたら、鬱陶しいです。この四角の枠の中の部分で、「言葉による伝え合いにおいて」という。これは、普通の名詞として考えればいいのであって、今、ここから先で言う伝え合いというのとは、また違うと考えておけばいいですか。

○武田国語調査官

前回の主査打合せ会の中でも、かぎ括弧の使い方についての御指摘がありました。ここはまたよく検討して、直していきたいと思います。ありがとうございます。

○山元委員

配布資料3の2ページ目の1の(2)の論の展開の仕方です。魔法のつえではない、まず、〇〇が理由、また、〇〇だ、さらに、〇〇だ、では、…となって、結論が最後の3行、「以下、この報告では、様々な意味合いで捉えられることのあるコミュニケーションのうち、…」というところです。

伝え合うところに焦点化して考えたいという結論なので、ここを改行して、こんなふうに変えたらどうかと思います。「以下、この報告では、様々な意味合いで捉えられることのあるコミュニケーションのうち、情報や考え、気持ちをやり取りし、互いについて共通理解を深めていくことに着目し、これを「伝え合い」という言葉で表していく」という提案です。伝え合いを結論としてすごく強調して、次につながるのによいのではと思いました。

○沖森主査

では、続きまして、3ページからの「2 伝え合いとは」の部分を読み上げていただきます。

○武田国語調査官

では、「2 伝え合いとは」の部分を読みます。

「(1) 互いに対する理解を深めるために、情報や考え、気持ちをやり取りする

伝え合いとは、複数の人が互いの異なりを踏まえた上で、情報や互いの考え、気持ちなどをやり取りし、互いについて理解し合い、その理解を深めることである。伝え合いの中核にあるのは、言葉による伝え合い(言語コミュニケーション)である。ただし、伝え合いは、言葉の周辺にあるもの、例えば、声量、声の質、話す速さなどによっても、加えて、視線、表情、姿勢、身振りなど、いわゆる言葉以外のものによっても行われる。

伝え合いは、参加する人それぞれが、送り手の側に立つことと受け手の側に立つことを切り替えながら進められる。例えば、対面の話し言葉による伝え合いにおいては、どんな瞬間にも、一方の役割だけを固定的に果たしているわけではない。送り手は、話をしながら相手の相づちの仕方や表情の変化を観察し、うまく伝わっているかどうか読み取ろうとする。また、受け手も、相手の言葉を聴きながら、自身がどのくらい話を理解しているかを伝えるように様々な反応を示し、よく分からないときには、質問などを挟んで送り手の側に立つ。

伝え合いは、言い換えれば受け止め合いであるとも言える。このようなやり取りを通して、両者は送り手と受け手の役割を切り替えながら、互いに協力して伝えたかったことを共有し、理解し合うことができる。

一方、文章などの書き言葉においては、対面による話し言葉の伝え合いのようなはっきりした双方向性があるわけではない。それでも、書き手は、読み手の反応を想定しつつ書き、読み手は、書き手の側に寄り添い自らの情報を補いながら読むことによって理解を共有するという点で、対面の場合と共通するところがある。さらに、SNSなどのテキストのやり取りのいは、広い意味での書き言葉でありながら、リアルタイムにやり取りが行われるということがあるという点で、話し言葉に近い双方向性が見られる。こうした、書き言葉と話し言葉の間に位置するような伝え合いの手段を、打ち言葉、ということができる。

そして、どのような伝え合いにおいても、うまく理解し合えれば新たな伝え合いへの動機が生まれ、理解し合えなかった場合には誤解を残したままになるなど、それ以降の伝え合いに影響することがある。

(2) 異なりを踏まえて歩み寄り、受け止め合う

人は、それぞれが全く別の存在であるため、自分と相手との異なりを十分に意識した上でないと、情報や考え、気持ちをやり取りすることは難しい。さらに、互いにその違いを乗り越えて歩み寄ろうとしなければ、円滑な伝え合いは実現しない。相手の聞く力や理解する力、知識の量、語彙力、情報を処理する速さなどを推し測り、相手が何を共有したいと期待しているのかを想像し、それらに沿うよう、相手に合わせた言い換えを行ったり、話す速度を調整したりすることによって、歩み寄りが行われる。伝え合いは、互いの歩み寄りの上に成り立っている。

もちろん、歩み寄るとは、相手に意見を合わせるばかりで、自分を押し殺すといった意味ではない。お互いに理解し合うための地ならし、土台作りである。歩み寄りとは、相手が伝えようとするのをうまく受け止めるために必要であるとともに、自らが伝えたい情報、考え、気持ちをきちんと伝えるための準備でもある。

また、伝え合いにおいては、そこに参加する人それぞれが、既に持っている知識や経験を基に相手からの情報を理解しようとする。そのため、各々の用いる言葉が意図したとおりに受け止められているとは限らないことを、いつも意識しておく必要がある。この点で、送り手は常に受け手の反応を見るが、受け手もまた、自分が話をよく聞こうとしていることや理解の度合いなどを、相手に伝わるよう表現することが求められる。伝え合いがうまくいくかどうかについては、一般的に、送り手の側が問題にされることが多いが、受け手の在り方によっても大きく左右されるものであり、その役割と責任は送り手と同じように大きい。

(3) 状況を把握し調整する

自分の参加している伝え合いにおいては、その伝え合いがどのように行われているか、状況を俯瞰的によく観察し、目的に合わせて伝え合いの全体を調整しようとするのが重要である。

そのためには、自分が相手に対して、どのような言葉や態度、表情などによって応じているのか、どのような様子で語っているのかなど、客観的な意識を持つことが必要である。それとともに、伝え合いがどのような段階に達しているのか、互いの理解がどこまで共有されようとしているのかなどを把握するよう努め、伝え合いができるだけ良い状態になるよう調整することが求められる。

(4) 伝え合いを難しく感じるのは自然なこと

人は皆、異なった存在であるという前提に立てば、伝え合いは常に手探りで行われるものであり、こうしておけば間違いないというような近道はない。事前にどれだけ準備

したとしても、伝え合いの目的や相手、状況などによって、その都度の対応が求められる。伝えた情報や気持ちが、いつでもそれぞれの意図のとおりを受け止められるとは限らないのである。

伝えたいことが相手にそのとおり伝わらなかつたり、受け取ったことが相手の意図と違ってしまったりするということは、日頃から多くの人が経験しており、いつでも、また、誰にでも起こることがある。常にうまく伝え合うことができて当たり前ということではなく、伝え合いを難しく感じるのは自然なことである。

とはいえ、より良い伝え合いは、言葉による伝え合い、つまり、言語コミュニケーションの在り方を工夫することによって達成できることが多い。次節では、これからの時代における望ましい伝え合いの在り方について考えるための前提として、伝え合いに関する現代の課題を見ていくこととする。」

○沖森主査

では、ただ今読み上げていただいた部分について、御意見を頂きたいと思います。

○山元委員

2点お願いします。

3 ページ目の(1)の下から3行目、「うまく理解し合えれば新たな伝え合いへの動機が生まれ」のところですが、この「動機」は、「意欲」という意味でしょうか。次に続くのは、伝え合いしたいという思いですよね。

2点目です。4 ページ目の(4)の3行目、読み上げられたときに、「伝え合いの場面」というのを「目的」とおっしゃったと思いますが、一般的には、目的、相手という並びで伝え合いを述べる人が多いんですが、「場面」だと、状況と一緒にかという思いがあって、むしろ「目的」の方がふさわしいかという感想も持ちました。

○沖森主査

後者については、「場面」でしょうか、「目的」でしょうか。

○武田国語調査官

「目的」と読み間違えました。正しくは「場面」です。

○石黒委員

細かい字句の修正というか、直さなくてもいいところかもしれませんが、「互い」という言葉が出てくると、気になることがあります。

3 ページ(1)の最初の段落の2行目「互いについて理解し合い」の部分。互いの場合は、し合うと言わなくても良いと思います。例えば、「互いについて理解し」。

次に、1 ページに戻り、四角の中です。私が以前に意見を申し上げたところですが、第1段落の最後の行の「互いの共通理解」の部分。共通理解は互いに決まっているので、ここの「互いの」も要らない。要するに、「まず最初に」の「まず」と「最初」が重なるような現象かと思います。

それから、3 ページ目(2)1段落目の3行目「円滑な伝え合いは実現しない」とありますが、「円滑な」というのは、気を付けた方が良い言葉かと思います。たまに「円滑なコミュニケーション」と出てくるのは良いですが、そもそも、お互いが分かるレベルのコミュニケーション、正確に伝わるレベルでのコミュニケーションのときは円滑でいいですが、そもそも立場が違っているときは、円滑に進まないですし、円滑に進まない方がよいと思うときもあります。だから、円滑と言わなくても、歩み寄りなので、適切とか、何か別の言葉の方がよいと思いました。

4 ページ目（3）第 1 段落の 2 行目「状況を俯瞰的によく観察し」って、すごく難しいことかなと。俯瞰的に観察すれば、遠くから見る感じですから、よくは見えないのではないかなと思うんです。ですから、「俯瞰的に観察し」でよいと思いました。

（4）第 2 段落の 2 行目から「いつでも、また、誰にでも起こることがある」という部分、「起こることである」かと思います。

○田中委員

3 ページ（1）第 1 段落の上から 4 行目、「例えば」で、パラ言語とか、羅列している部分です。「例えば、声量、声の質、話す速さ、さらには、視線、表情、姿勢、身振りなど」でよいと思います。「加えて」も、累加だけれども、「さらに」とか「さらには」の方がよいと思います。「などによっても、加えて」というのは、少しくどいです。

同じ（1）第 4 段落、「一方」で始まる段落の 3 行目です。「書き手の側に寄り添い自らの情報を補いながら読むことによって」の部分。分からなくはないですが、ここは、「書き手の側に寄り添いながら読むことによって」で、意味は通じると思いました。

この段落の最後のところ「こうした、書き言葉と話し言葉の間に位置するような伝え合いの手段を、打ち言葉、ということが出来る」の部分。ここも括弧にするのか、カンマにするのか。もうちょっと別の表現ができるかなと思いました。ここについての代案はまだないです。

それから、（2）の二つ目の段落「もちろん」で始まる段落の最後。「自らが伝えたい情報、考え、気持ちをきちんと伝えるための準備でもある」。歩み寄りとは、伝えるための準備と言っていいのかなどうか。

4 ページ目（4）の最初の段落の 2 行目の「近道」。「王道」は駄目だから「近道」なのかなと思ったんです。

あと、（4）の最後のところで「見ていくこととする」とありますが、別の表現があるかもしれないと思いました。

○塩田委員

先ほどの石黒委員の「互いの共通理解」、重複表現については、人それぞれ、相当感じ方が違うので、私自身は、例えば、「満天の星空」とか、歌の歌詞というのは、そんなに気にならない方です。「互いの共通理解」も、個人的にはそんなに気にならない、強調表現の部類かなと感じました。当然、互いに決まっているんですが、その中でも強調するという意味で、私は気になりません。事務局にお任せいたします。

あとは、3 ページの「、打ち言葉、ということが出来る」は、もしこのままなら、「いう」は漢字かなという気もいたしました。あるいは、先ほどの田中委員の御指摘に従って言い換えるのであれば、「…と位置付けることが出来る」という言い方もできるかもしれないと思いました。

4 ページの（3）の 2 行目、「俯瞰的に」、もしこのまま使うんだったら、ルビが要るのでは。多分、表外字だと思います。

あと、（4）第 3 段落、「とはいえ」は、これも漢字かなと。接続詞なので平仮名かもしれませんが、漢字かという気はしました。

○関根委員

今、改めて見ながら、さっき長過ぎるという御意見があったので、どうやったら短くできるかというのを考えながら読んでいました。確かに、かなり丁寧に書かれているので、繰り返しというより、また別の言い方で説明し直しているみたいなどころがあります。もちろん、その方が、初めて読む人には分かりやすいんでしょうが、もし短く

するのであれば、その辺を思い切って削るという手もあるのかと思いました。

例えば、一つは、細かいことと言えば、3ページ「伝え合いとは」で始まっていて、2行目で「伝え合いの中核にあるのは」と、伝え合いというのを繰り返していますが、ここは「理解を深めることである。その中核にあるのは」が良いと思います。そうやって、単語レベルでもうちょっと短くできるかもしれない。

それから、(1)の第2段落と第3段落は、ほぼ同じことを言っています。第3段落は受け止め合いということの説明する必要があるのかもしれませんが、この辺りは、どちらかにしてもいいのかもしれない。

その次の「一方、文章などの書き言葉においては」、その次の「対面による…」のところは、前で説明しているところなので、「文章などの書き言葉においても、書き手は、読み手の反応を想定しつつ書き」と、そっちにつなげることもできると思います。

打ち言葉の説明については、私も多少唐突感を感じます。つまり、ここは打ち言葉ということの説明するところではないので、例えば、「さらに、キーボードを打って行うSNSなどのテキストのやり取り」として、そこのところで、例えば、括弧で、(これを打ち言葉という。)などと説明するという手もあるかと思いました。

それから、(2)の最初から3行目と、3行目の後半の「相手の聞く力」、その部分が同じことを言っていると思います。互いの違いを乗り越えようというのを、更に詳しく説明している。

第2段落も、最初の2行目と2行目の後半の「歩み寄り」以下も、より分かりやすく具体例を入れてもう一回説明しているところがあると思います。これは最初のところなので、より短く簡潔にするために、具体例は入れないで趣旨だけ入れるか、あるいは、具体例をちょっとずつ入れてまとめるかでよいと思います。

4ページ3行目「この点で」以下も、意図したとおりに受け止められているとは限らないことを意識していくということですが、だから、「この点で」というのは出てきますが、この説明も、より丁寧ですけど、例えば、こういうのはQ&Aの方に回すという手もあるかと思いました。

(3)も、先ほど、「俯瞰的」というのが分かりにくいと言っていましたが、2段落目の「そのためには」以下、いきなり「自分が相手に対して」から始まっても、「客観的な意識を持つことが必要である」という感じで十分伝わるかと思いました。

(4)についても、4行目に、伝えたい情報や気持ちが、意図のとおり受け止められるとは限らないとある。その次にまた、伝えたいことが伝わらなかったりすることはよくあると。この辺りも、まとめられるかと思いました。

丁寧に説明するのは大事なことだと思いますが、ある時点では、思い切ってばっさり削るということも、より分かりやすい文章になることにつながると思うので、思い切りが必要かなと思いました。

○川瀬委員

関根委員もおっしゃっていたように、すごく心優しく寄り添う文章だと思っていました。コミュニケーションが難しくなくて難しく、と悩んでいる人が手に取るんだったら、難しいのは当たり前なんだと、とは言え、それはあなただけのせいじゃないんだというフォローや寄り添いが必要だと思います。極端に言うと、これはコミュニケーションが難しいのは当たり前ですという前提からスタートしています。「(4)伝え合いを難しく感じるのは自然なこと」なども、本当に必要なのは、(4)の一番下の「より良い伝え合いは」以降だけだと思います。

すごく心優しく、人と接することができなくて落ち込んでいる人が読むには、とても優しく良い文章だと思います。ただ、みんな、何とかしたいと思って、これを手取るんでしょうから、ここまで寄り添わなくても、それこそ、ずばっと、ばさっと言

ってもいいのか。特に冒頭部分はそれでよいと思いました。

○鈴木委員

(1)の最初の段落ですが、3行目「中核にあるのは、言葉による伝え合いである」と。その後に「例えば」として例を挙げて、「いわゆる言葉以外のものによっても行われる」。それはよく分かりますが、言葉以外のものによって、中核にある言葉による伝え合いが影響されるということもあるのではないかと思います。

例えば、私はそれについて反対ですという表明をしたいときに、まじめな顔をして言うのと、笑いながら言うのとでは、明らかに伝わり方が違う。同じ文章を発言していても、違うということがあり得るので、ここは影響されるという面も一応入れておいた方がよいのではないかという気がしました。

○山元委員

全体のことで意見を申し上げますと、先ほど、寄り添った文章だとおっしゃっていましたが、本当に私もそう思います。武田調査官の熱い気持ちが分かるという点では、とても共感して読ませていただきました。

ただ、流れを付けて論述する方が、つい読んでしまうということがあると思います。つまり、1, 2, 3, 4が列挙にならないような見出しの付け方を。1, 2というのは、これは伝え合いの意味合いを言っていることなので、(1)のタイトルを「伝え合いとは〇〇すること」として、(2)は「伝え合いとは〇〇すること」、もしかしたら、これは一つにまとめてもいいかと思えます。

つまり、伝え合いのイメージを共有するというをまず初めにして、(3)は、「伝え合いに必要なのは」とか、そういうことを付けたらどうかと思います。そして、4番目に、「伝え合いを難しく感じるのは自然なこと」とする。1から4を列挙というイメージではなく、伝え合いのイメージの共有、そして、伝え合いに必要なことはこうだ、そして、それを難しく感じるのは自然なことだという流れを作って見出しを付けていく。そうすると、関根委員のおっしゃった、文の短縮プラス流れ作りとなり、つい読んでしまう文章になるのではと思いました。

○塩田委員

この寄り添いのメッセージについてですが、私はこう思っています。

この文章を手取るのは、コミュニケーションが苦手だからという目的で取る人もいます。既にもう俺はできていると自認している方も取ると思います。そういった方に、今回の提言では、「いや、自分はできている」と思っているかもしれないけれど、「できない人のことをそんな下に見るなよ」ということも伝えたいと思います。そういう方々に、「いや、できないと思っている人は一杯いるんです。当たり前のことなから、そんなに悪く見ないでください」ということ、そんな目的のためには、あった方がよいと思っています。

○入部委員

(1)が長い。その前のIの(2)も長いという御指摘があって、それを字句レベルで少しずつ削って短くという、そういう考え方もあるかと思いますが、挿絵的なものも欲しいという感じがします。

この文章の中にグラフのデータを組み込むのは読みづらいということで、以前にお話ししました。そこで例えば、(1)の一番下のところで、折れ線グラフのようなものではなくて、簡単な表で、例えば、「自分の考えや意見を積極的に表現する方だ」が30何%、「そうでない」が何%といったような、簡単なグラフをアクセント的に入れるの

はどうでしょうか。これは何だろうと、そういう挿絵のような感覚で、それを解説するわけではなく、そういったものを入れる。これだけ文章がずっと並んでいると、大学生などに読ませるのはちょっときついかと思います。挿絵が入っていると、そこから入って文章を読ませるという方法もあるので、そういう紙面の工夫も、この負担を緩和するのかなという気がします。

○沖森主査

ほかに、いかがでしょうか。（→ 挙手なし。）

御意見がなければ、続きまして、4ページの「3 伝え合いについての現代の課題」を読み上げていただきます。戻っていただいても結構ですので、後で御意見を頂きたいと思います。

この中では、所々と言いますか、後ろの方が特にそうですが、主査打合せ会で先送りになっているところもあり、その部分は省略してあります。そのことを御承知おきいただきたいと思います。

○武田国語調査官

では、「3 伝え合いについての現代の課題」を読みます。

「(1) 社会の多様化、他者との異なりの拡大

都市化、国際化、情報化などの進展とともに、かつての共同体での結び付きが緩やかになり、顔見知りではない人、考え方や生活習慣の違う人たちと接する機会が多くなっている。ウェブ上では、国境に関係なく、見ず知らずの他人と交流することも可能である。伝え合おうとする他者と自身との間の異なりは、以前よりも大きくなり、お互いに受け止め合うことも、その分難しくなっているおそれがある。

さらに、察し合いの文化などとも言われる意識が、現代の伝え合いを妨げている面がある。「国際社会に対応する日本語の在り方」には、「日本人は伝統的に、言葉で言い尽くさずに互いに察し合うことに価値を置いてきた。これは、我が国の歴史の中で培われた、日本人同士が共有する感性、思考方法、行動様式などにわたる種々の同質性を前提に、少ない言葉で効率的に意思の疎通を図ろうとする習慣に伴うものである。／しかし、異なる文化的、社会的背景を持つ人と接する場合には、相手の察しに頼る従来の日本的な表現方法では意思が通じにくく、誤解を生みやすい。」との指摘がある。「感性、思考方法、行動様式などにわたる種々の同質性」は、少しずつ失われつつある。これからの時代は、同質性よりも異なりや多様性があることに注意し、簡単には伝わらないこともよくあるといった認識に立つことが求められている。

(2) 理解し合うことが難しい人とのやり取り

社会の多様化と情報化によって、考え方や意見などにおいて、理解し合うことが難しい人や相いれない面がある人との間でのやり取りが生じる場合がある。

一つは、専門家と一般の人々との関係である。様々な分野で高度な専門性が求められるようになってきている現代においては、かつて伝え合う機会が必ずしも多くなかった専門家とそれ以外の一般の人との間で、直接のやり取りが生じるようになった。両者の間で、どのように知識の差を埋めながら伝え合っていくかは、これからの課題の一つである。

また、他者との異なりがよりはっきりと表れる場合として、政治的な立場、宗教や信条の違いなどがある。お互いの主張や考えが真っ向からぶつかるような場合にも、どうしたら互いを尊重して歩み寄り、共通理解を図っていくことができるのか、多くの人がそのためのヒントを求めている。

一方で、いわゆるヘイトスピーチのように、特定の人物や団体、民族、国家などに対

して、攻撃的で憎しみをあおるような言葉が一方的に投げ付けられるといった状況が問題になることもある。伝え合いの可能性を頭から否定するような在り方に対して、どのように対処することができるのか、うまく距離を置き、場合によっては避難するといったことも含め、考えておくことが望ましい。

(3) 個人の意識と社会全体に対する認識の食い違い

「コミュニケーション能力」への期待が高まる中で、きちんとした言葉遣いができないと、社会から認めてもらえないと感じている人も多い。自分の言葉や言葉の使い方に気を付けているという人は多く、しかも増加している。各個人が言葉遣いに敏感になっているという傾向がある一方で、社会全体の国語をめぐる関心や知識・能力に関しては、以前よりも低下していると感じる人が、向上していると感じる人よりも多くなっている。言葉や言葉遣いについて、個人の意識と社会全体に対する認識との間に、食い違いが見られる。

伝え合いのための力を身に付け、しっかりと自己表現することを望みながらも、実際には、誤りや言葉遣いが十分でないことを指摘されることを恐れて、萎縮しながら自身の言葉を気にしている人が少なくない。できるだけ丁寧な言葉遣いを心掛けた結果、行き過ぎた敬語の使用に陥り、その点をまた問題にされるなどといった悪循環も生じている。

言葉や言葉の使い方に対する個人の意識の高まりが、社会全体の望ましい伝え合いの在り方につながっていくことが期待される。

(4) 世代ごとの伝え合いに関する意識の相違

伝え合いや言葉遣いに対する意識については、世代間で異なる傾向が見られる。

「コミュニケーション能力」は、大学生や社会人になろうとする人々に求められる力として話題になることが多い。実際、若い年代ほど、「コミュニケーション能力は重要である」という意識を持つ人の割合が高くなっている。また、伝え合いがうまくいかなかった経験について、若い年代の方が、その原因を自分の問題として捉えようとする傾向や、相手や場面に応じて、自分の態度を変えようとしたり、自分とは考えの違う人に対して、柔軟な態度を取ろうとしたりする傾向がある。

一方で、年代が高くなるほど、相手や場面に関係なくいつも同じような態度でいるという人が多くなっている。自分とは考えの違う人に対して関わりを持たないようにするような傾向も若い年代に比べて強い。伝え合いにおいて、相手に合わせようという意識は、若い世代により強く見られるという現状がある。

ただし、相手の意見に合わせ、自分の考え方を押し隠してしまっただけでは、伝え合いのための歩み寄りとは異なってしまう。相手や場面に応じて変わること自体が「コミュニケーション能力」なのではない。自身の考えや気持ちを伝えるための土台としての歩み寄りを意識する必要もある。

学生や社会に出て間もない人々が、伝え合いの力を身に付けるために努力することが大切なのは言うまでもない。だが、それとともに、知識や経験、理解力が十分である人々が、それらをこれから身に付けようとする人々に歩み寄る必要もある。自分の考え方や気持ちに従うことを若い年代の人たちに対して求めているか、彼らが他者に合わせようとする傾向があることを踏まえた上で見直し、共通理解を図るよう努めることが期待される。伝え合いについては、全ての年代に深く関わる課題として、改めて見直される必要がある。」

(5), (6), それから、4については、今、主査打合せ会で詰めている部分ですので、今回は省略しております。

○沖森主査

それでは、御自由に御意見を頂きたいと思います。

○田中委員

5ページの(1)の続きの上から4行目のところで、「である。」の後に「/」が入っているのは、これは原文が改行だったということを表しているのでしょうか。普通の表現方法なんですか。

○武田国語調査官

時々見られるものをそのまま使ってしまったんですが、安易に使っているところがあると思います。公用文で、この辺りについての決まりが特にあるわけではないので、検討したいと思います。

○田中委員

そこから2行下がって、「「完成、思考方法…の同質性」は、少しずつ失われつつある」とありますが、何かに配慮しているんだと思うのですが、「少しずつ」はなくてもいいかもしれない。

同様に、その1行下、「簡単には伝わらないこともよくある」。ものすごく強調したいのかもしれませんが、ここも「ある」だけでよいと思います。

(2)の下から2行目、ここでの意味は、場合によってはエバキュエート (evacurte) するということですか。その現場から逃げちゃいなよという意味ですか。

○武田国語調査官

ここは、主査打合せ会でも話題になったところで、まだきちんと主査打合せ会でお話しいただいているわけではないんですが、そういったところから逃げるというか、うまくスルーするというか、取り合わないというか、そういったことを書いたつもりです。

○田中委員

逃げちゃいなよという主張は、私は別によいと思うんですが、「場合によっては避難する」ということが意図どおりに伝わるのかというところが、気になりました。

そして、5ページの下(4)のところ、タイトルが「世代ごとの伝え合いに関する意識の相違」になっていて、書かれていることも、基本的に、コミュニケーション観の違いといった内容になっています。ただ、1行目に「伝え合いや言葉遣いに対する」とありますが、言葉遣いの話はしていないと思います。

もし入れるんだったら、長くなってしまうので、意識が違うといったことだけでもいいかもしれないし、もしかすると、ジェネレーションギャップが全体としてあるんだということにするんだらば、もうちょっと書き直してもいいのかもしれないと思いました。

6ページも、もう少しここはがらっと変わるのかもしれませんが、上から5行目、「自分とは考えの違う人に対して、柔軟な態度を取ろうとしたりする傾向がある。」というのは、かなりポジティブの面だけに光を当てているのかなと思います。ここはもう少し表現を工夫してもいいと思いました。

その次「一方で」の段落のところの最後の一文「伝え合いにおいて、…現状がある。」という部分。ここは高年齢層のこの話をしていんですが、最後に、上のパラグラフで言っていたことをもう一度入れているので、この一文は必要ないか、どこか前にそえるなどした方がいいのではないかと思います。

○塩田委員

まず、5 ページの(2)の第2段落の最後、「これからの課題の一つである」と言うと、今回、問題を先送りにするような印象を受けるので、「これから」はなくてもいいかと。「課題の一つである」でよいと思いました。

あと、避難については、一般的には、やはり物理的に自分の存在場所を別のところに移すというのが、普通の解釈だと思うので、ここでは、「場合によっては関わり合いを避ける」などでどうかと思いました。

次、6 ページの上から4行目の「その原因を自分の問題として」、これでもいいと思いますし、あるいは、もっと明確に、「その原因の自分の責任として」の方がもっとはっきりするかと思いました。

6 ページの第2段落のところは、私も同じように感じました。年代が高年齢層のことを話しているのに、最後だけ、また若年層の話に戻ってきてしまっている。高年齢層で通すんだったら、「伝え合いにおいて、相手に合わせようという意識は、高い年代では希薄である」と言ってしまうか、とにかく、一つの段落の中で戻ってきているところがあるので、工夫した方がよいと思いました。

○川瀬委員

(4)について、多分、この会議の最初の方に、「だったら言ってよ」や、「だったら聞いてよ」みたいな話が随分あったせいもあると思うんですが、どうも論調が、横暴な上司に抑圧されるかわいそうな若い人みたいなトーンだけで書かれているような気がします。

企業の中ではそういうこともあるし、街中でもそういうことがあるのかもしれませんが、むしろ若い世代の方が柔軟な態度を取ろうとしようとするんじゃないかと、もう自分とは違うカテゴリーの人だと忌避するという面もあるように思います。おじさん、おばさんたちの方が頑^{かたく}なだよ、若い子は若い子なりに頑張っているんだよという部分ばかりが強調され過ぎではないかと思います。「はい、はい」と大人をいなして、最初から関わろうとしない若い世代もかなりあると思います。その結果が、不幸なコミュニケーションの不成立になっているように思います。

ただ、実際手に取る方は比較的年代が上の方なのかというのを思うと、いいのかなという気がします。大人だけがまた我慢させられるような気もしなくもないです。

○山元委員

6 ページ第2段落の今の点に関して、若い世代と高年世代の問題点の指摘のところ、○○という現状がある、こう書かれると、本当にそうかなという反応が生まれがちです。これは、何か根拠となるデータを基におっしゃっているような感じもあるので、そのデータの出典を下に書くなり、ちょっと括弧で入れるなりしてはどうか。いろんな感じ方はあるけれど、このデータから言うと、こういう現状があると言えれば説得力が増すのではと思いました。

○入部委員

私も山元委員と全く一緒です。非常に丁寧に、データを基に、全てに根拠資料が、実は段落ごとにあると思います。「国語に関する世論調査」のデータと、ウェブ調査を、これまでずっと穴が開くほど見ていて、本当に丁寧に、1対1対応に近い形で丁寧に書いていらっしゃるの、これ以外の書き方もないというのも、この前、見ながら思いました。これも、繰り返しのようですが、幾つか聞き方を変えて調査をされているもの

は、それに対して段落を変えて書いていらっしゃるのだなというのを、今回、すごくそれを感じながら見えています。

山元委員がおっしゃるように、根拠資料をどのように出すかということについて、本文中に元々入れていたのを外したということなので、先ほどの繰り返しになるんですが、その一部だけ、一番見やすい形で、挿絵程度の大きさに、実は根拠ありますよというのをカモフラージュするのはどうでしょう。思い込みなんじゃないのかという御指摘に対して、なかなかお答えできなくなってしまうということに対応できるかと思えます。非常に丁寧に書いて、優しいというよりも、丁寧に、データに対して誠実に書いているというのが感想です。

○沖森主査

今の点で言えば、Q & Aの方にうまく移して、その表などもふんだんに示せるようになれば、もっと分かりやすくなるかなと、そういうところはあります。

○石黒委員

5 ページの(2)で、先ほどお二方から問題になった、ヘイトスピーチとか、避難とかに関してです。これは二つのことが混ぜこぜになっているというイメージを持っています。

ヘイトスピーチに関しては、社会としては、やっぱり断固闘うべきだと思います。そこから逃げては仕方がないし、もちろん、傷付く人は耳を塞ぐ必要もあるとは思いますが。

それはそれであって、ここで距離を置いて避難しなければいけないのは、いわゆるモンスターです。傷つける意図を持って自分に近寄ってくるような人がいて、そういう人たちのことをまともに取り合ってしまったって、非常に心理的ないろんな負荷を帯びてはいけないというようなことが、書かれるべきなのかと思っております。

それから(3)ですが、最初の段落の最後の行「個人の意識と社会全体に対する認識との間」というのは、よく読むと正しいことが書かれているんですが、すごく難しいと思います。つまり、調査とは、一人一人の目から見るのと、その一人一人の目の集合体として見る面があって、確かに、一人一人の面から見ればこう書くんですが、普通に、「個人の意識と社会全体の認識」ぐらいとし、両方のものでもいいのかなと思えました。

○沖森主査

ほかに、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。(→ 挙手なし。)

残されたのは、最後の7 ページ以下の部分になるんですが、説明をお願いします。元に戻っても結構ですので、後でまた御意見を頂きたいと思えます。

では、配布資料3の7 ページ以降について、事務局から説明をお願いします。

○武田国語調査官

それでは、7 ページ以降について御説明します。先ほども御指摘がありましたが、7 ページ以降、きちんとしたものをお示しできる段階ではありません。

特に、今回変わったところをお話ししたいと思います。

まず、四つの観点にどういうラベリングをするか、どういったシールを貼るかという話です。前は、「正確に」、「分かりやすく」、「受け入れやすく」、「ちょうどよい距離を取って」というラベルでした。それを、「ちょうどよい距離を取って」を、「距離の程良さ」という言い方でしばらく主査打合せ会では検討していました。その後、もう少し分かりやすい言葉の方がよいのではないかということで、現段階では、「ふさわ

しさ」と「距離の心地良さ」という言い方をしています。

ただ、やはり「ふさわしさ」と「距離の心地良さ」のところの境目について、分ける必要があるときちゃんと打ち出すことが大切であろうというのが、主査打合せ会の中で話題になっているところです。このラベルの付け方によって、それを失敗してしまうと、この三つ目と四つ目の境目がうまく見えなくなってしまう。そういうことにならないようにしたいということです。

それから、7ページの一番上に「1 伝え合いについての課題を解決するために」を挟んであります。これは、課題を「I」の方で並べておりますので、具体的な話をする前に、その課題を一旦、焦点化するという部分になると思います。「2 言語コミュニケーションにおける四つの観点」以降で四つの観点を取り上げながら、その課題と向き合っていくこととなります。

さらに、9ページ以降のQ&Aですが、今日は具体的なものはお示ししていませんが、なるべく早いうちにお示ししたいと思っています。現在、主査打合せ会の各委員からは、より詳しいものを頂いております。グラフなどが入ったり、参考資料が示されたりというものがあります。それを御覧いただいて、更に数が増えるということになると思います。場合によっては、主査打合せ会だけではなく、国語課題小委員会の委員の皆様にも執筆の御協力を頂きたいと思っています。この部分に関しては、次回、全体ではないですが、具体的なものをお示しできるようにと考えております。

○沖森主査

では、ただ今の事務局からの御説明を踏まえまして、まだ具体化していかなければいけないという段階ですので、どのようなことを書き込めばいいかというアドバイスも含めて、御意見を賜りたいと思います。

○塩田委員

いろいろ手を入れているうちにこうなったのかと思います。最初の「的確な言語コミュニケーションの条件とは、……が、……と支え合う状態であると考え」と言うのと、条件というものが状態ということになってしまうので、文がねじれているかと思いました。

恐らく、ここで主張したいことは、これこれこれこれ「…の四つの要素であり、」ここで一回切ってしまう。「…の四つの要素であり、それぞれを生かしつつ、他と支え合うものである。」あるいは、「…支え合う性質のものであると考え」といった形になるかと思いました。

あと、四つの区分の中の「距離の心地良さ」の中の「自分らしさが表れているか」は、個人的には、この「自分らしさ」は、この四つとは違う側面であるかと思います。どうしても入れるのであれば、「距離」ではなく、「ふさわしさ」かとも思います。

○滝浦委員

さっき発言したときに、二つ気が付いたと申し上げましたが、二つ目が、用語と言いますか、タームとしての収まりの良さということで、この手の文章は、なるべく収まりのいい言葉を、ちょっとこだわって追求してもいいかなと思っています。その観点で二つ取り上げたいところがあります。

一つは、2章のタイトルです。1ページと7ページで、言葉による伝え合いの「言葉による」が、あったりなかったりというのがあるんです。1ページの方で見ると、「これからの社会に求められる言葉による伝え合い（言語コミュニケーション）の在り方」というので、大分長い。

一方、7ページは、「言葉による」がない分、短い短いんですが、もうちょっと工

夫できないか。案として、「在り方」を後ろに回してしまっ、「言葉による伝え合い（言語コミュニケーション）のこれからの在り方」ぐらいにすると、もうちょっと縮まるかなと。「在り方」も取っ、「…のこれから」という言い方も可能かとは思いますが、多分、「在り方」を何となく入れたい感じがあると思っしたので、それが一つです。

あと、ここはずっ懸案事項なんだということが、先ほどの御説明でもよく分かりましたが、四つの観点のラベルです。いじっているうちに、収まるどころとずれてきてるところが多分両方あって、今回のもので見ると、「正確に」と「分かりやすく」というのは副詞的な感じですが、「ふさわしさ」と「距離の心地良さ」というのは名詞的な感じになっていて、ちょっと品詞的にずれています。さらに、四つ目が難しくてこうなっていると思っますが、そこだけ「距離の心地良さ」となっていて、次元が違うラベリングになっている印象があります。基本的にそろえた方がよいとは思っんですが。そろえるに際して、二つの考え方があるかと思っます。

一つは、本当にそろえるだけで、「正確さ」、「分かりやすさ」、「ふさわしさ」、「心地良さ」として、「〇〇さ」で全部そろえてしまう。四つ目の距離…が落ちますので、それは留意事項の一番頭で、距離感みたいな言葉でも使っ、触れていく。ただ、それを考えてみたときに、そろっている感じはすると思っんですが、ぱっを見た人が、それぞれでどんなことが中身としてあるかというのを思い描きにくい。切り詰められ過ぎていて、思い描けなくなっってしまうところがある気がします。

そう思っ中身を見ますと、1番目は、言葉そのものに関して、2番目が、その言い方に関して、3番目は、話す中身や話題に関して、四つ目は、自分と相手との関係に関して、そう対応していると思っますので、それを逆に入れてしまっそろえるというやり方もあるかと思っました。それでいくと、「正確な言葉」、「分かりやすい表現」、「ふさわしい内容」、「心地良い距離」です。最後に距離も一応収められます。そんなラベリングもお考えいただいたらどうかと思っましたので、申し上げました。

○石黒委員

今回、報道発表があっ、机上資料「国語に関する世論調査」の4ページ、先ほど入部委員と山元委員から、若者のコミュニケーションに関しての指摘があっ、私も正直ショックを受けました。まとめ方として、なるべく事を荒立てず、相手の気持ちになじむように話し、人間関係を優先し自分の意見を主張しない傾向があると。これは特に若い人が10年前に比べて、10ポイントぐらいそういう傾向が強まっているというデータです。ある意味では、従順で空気を読むようになってきているのかもしれないし、川瀬委員の御指摘のように、もう上の世代は上の世代で、どうせ変わらないし、言っもしょうがないから、私たちは私たちの世界にしようみたいなことかもしれません。そういうところも見られる気がして、少し心配な状況です。

この枠組みの中でどこに取り入れられるのか考えたときに、滝浦委員から、ふさわしい内容と話題という話がありました。言っもしょうがないとか、相手に正確に分かりやすく伝えると、かえっ相手が困っしまうこともあるわけです。相手と自分の立場が違う場合。だから言わないということが起きるわけですが、こういう会議の場であったらなおさらだと思っますが、たとえ違っても、一度は言っみるということが大切です。

最近、例えば、アサーティブネスとか、あるいは、『嫌われる勇気』に代表されるようなアドラー心理学の話とか、きちんと人の気持ちを測ることも重要だけど、やっぱり言うべきことは言わないとというようなことあると思っます。ただ、ふさわしい言い方があっ、いきなりぼーんと言っしまっはいけないだろうということ。だから、ある意味で、距離の心地良さと、対人的な問題と、ふさわしい内容とは、対

立する。つまり、正確だからといって分かりやすすくないのは、結構対立することが多いという話がありました。同じように、ふさわしいことを言ってしまうと、相手との関係が心地良くななくなってしまうことが起きることもある。そのように矛盾するものとして、「ふさわしさ」のところに、そうしたものをいれ込んでいけばいいのかと、このデータから感じました。

○関根委員

ちょっと気になっていることで、この四つのラベルの貼り方として、一つは、「ふさわしさ」が全てにわたっているようなところもある。それから、「心地良さ」の心地が、正確や分かりやすいと比べて、やっぱり心理的な、それぞれの気持ち次第というような、若干主観的なものが入っているような気がしています。心地良さが、それぞれによって違うわけです。それが前から気になっているのですが、どうしたらいいのかなと思っています。

さっき滝浦委員の言われたような感じでやると、とても分かりやすくというか、きれいにできます。ただ、それで気になるのは、表現にしても、言葉にしても、内容にしても、これ、どれにも当てはまる場合がある。つまり、正確な表現ということもあるし、分かりやすい場合でも、表現だけではなくて、単語レベルでもある。ふさわしいについても、その場面に合った言葉というのものもある。それはそうなんだけど、さっきのような整理の仕方をすると、一見してすごく分かりやすい、入り込みやすいという利点はあるかと思いました。

もう一つは、言葉の言い回しをいろいろ工夫してきた結果、こうなっているわけですが、当初の「ふさわしさ」というのは、配慮とか気遣いだったわけです。それだけにとどまらないものがあるので、いろいろ検討してこうなっていったわけです。それから、「距離の心地良さ」も、専ら敬語に関連することだった。しかし、敬語と言ってしまうと、ただ敬語を使えばいいというものになりかねない。でも、そうではないので、その距離感というものが入ってきたというのはよく分かります。

ただ、正に分かりやすさということを言うと、配慮とか敬語とかということ、ラベルとして出した方が、一般の人には分かりやすいのかなという気もまだしています。いや、もちろん、それに戻せという意見ではありません。

○山元委員

「観点」と「要素」の言葉の使い分けをきちんとするか、又は統一するかについて、御意向を頂きたいと思います。どっちかというのと、「要素」の方がいいでしょうか。

そして、2のタイトルですが、これは前回も言って、しつこくてごめんなさい。「に おける」という、おけるというのはよく使うんですが、曖昧なところがあるので、「言語コミュニケーションを捉えるための四つの要素」かな、「…の観点」かな、また御検討いただければと思います。

○塩田委員

これから表をもっとかっちりさせたものにするときの観点なんですけど、このまま見ると、上の方に文字で、「状況によって、どの要素を優先し、あるいは控えるのか」と書いてはあるんですが、この表だけが目に入ると、この留意事項全てを満たさなければいけないのかと誤解をされかねないです。そうではないはずですよ。

例えば、学会発表では、分かりやすさを削ってでも正確さを優先することがありますし、例えば、懇親会でお酒を飲んでいるときには、距離の心地良さをかなり優先させないといけないわけで、この留意事項というところが、それぞれの観点を優先させる場合の留意事項とか、何かちょっと付けておいた方がいいかと思いました。

○沖森主査

次回も、最終的な報告まで御意見を頂きたいと思しますので、一応ただ今の御説明に対する御意見は、ここで一応これ以上ないと判断させていただきます。

最後に全体にわたる御意見、あるいは、御提言などがございましたら、頂きたいと思ひます。いかがでしょうか。

○川瀬委員

よろしいですか。後ろのQ&Aについてです。極力文字は少ない方がよろしいのではないのかと思ひます。Qにしても、Aにしても、ショートアンサーの後ろにロングアンサーが、また解説が付いてくるのかもしれないが、そこへ導くためにも、質問2行、回答2～3行ぐらいが適当に思ひます。何となく状況をリアルに想像させるような心の言葉みたいなものが今のところは丁寧に挟んでありますが、やっぱり知りたいのは答えだと思ひるので、読みやすくするためにも、文字は極力少ない方がよいと思ひておひます。

○森山副主査

先ほどの4観点の「ふさわしさ」というのが、どうしても上位概念という気がしまひす。正確さ、分かりやすさ、(敬語の)距離の心地良さというの、全てある意味でのふさわしさであるように思ひますので、いっそのこと、「場面や状況のふさわしさ」にするのはいかがでしょう。「台風の当たり年」のような、そういう言葉を使って心証を害してしまうというお話だったかと思ひんですが、確かに、敬語でもないし、分かりやすさ、正確さでもないの、一つの柱として必要だと思ひんですが、もうちょっと下位レベル、特定のな方がいいような気がいたしまひました。

それから、もう一つ、1ページ目の四角の枠の中、第3段落「伝え合いに完全な正解はない」という部分について。完全な正解が絶対ないかという、そうではなくて、やっぱりこの言い方がいいでしょうとか、それはちょっとおかしいでしょうということも出てきますので、ここでの主張としまひて、「伝え合いには常に完全な正解があるわけではない」くらいにしておいた方が、整合性があるような気がしまひました。

○沖森主査

本日頂いた御意見を踏まえ、整理を続けてまいりたいと思ひます。次回の国語課題小委員会は、約1か月後になります。その際には、国語分科会でお示しする審議経過報告案について検討していただく予定です。

では、本日の国語課題小委員会は、これで閉会といたしまひます。本日は、御出席、どうもありがとうございました。